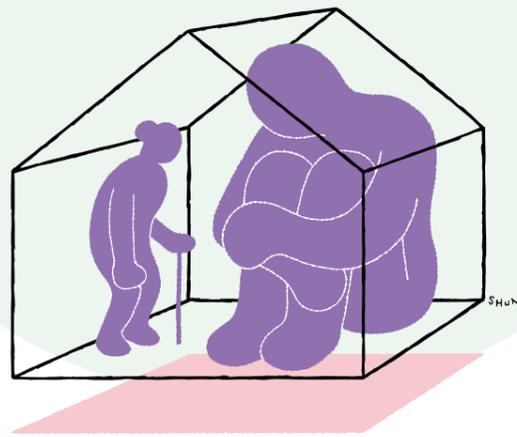


80問題 注目 50



長期化する ひきこもり



増える複合的課題を抱える世帯 求められる「家族まるごと」支援

2月はじめ、東京・大田区で行われたひきこもり支援の講座に、地域で活動する約50名が集まった。集まったのは、ひきこもりの人とその家族への支援に関心を持つ人たち。民生委員・児童委員、地域包括支援センターの職員、ケアマネジャー、自立相談支援機関の相談員、訪問看護師、ひきこもりの子どもを持つ家族会のメンバー等、立場はさまざま。

参加した理由も多岐に渡る。「近所に認知症の祖母を介護している孫がいる。このままひきこもりにならないか心配」（民生・児童委員）、「親子関係に問題がありそうだが、高齢の親への支援が目的なので、どこまで踏み込んでいいかわからない」（ケアマネジャー）、「精神障害の人の訪問をしている。ひきこもりの人の支援に関心がある」（訪問看護師）等々。

この日の講座のテーマは、「なぜ“今”ひきこもり者とその家族への支援が必要なのか」。80代の親が50代の子を支える「8050問題」が深刻化している。生きづらさを抱えた本人と家族をどのように理解し、地域でどのように支えていくのかを学んでもらおうと、区が当事者らによる支援を掲げて活動する「NPO法人楽の会リーラ」（東京・豊島区）とタッグを組み、開催した（関連記事 p.22）。



東京・大田区で行われた、ひきこもりの人とその家族への支援に関する講座。地域のさまざまな関係機関が集まった

「まずは参加者同士のネットワークづくりと、ひきこもりの人の生きづらさへの支援について知ってもらいたかった」と区の担当者は話す。社協や区内にある若者支援の事業所、既存の家族会なども共催した。

区内では昨年からは、ひきこもり当事者や家族が、気軽にお茶を飲んだり話ができる場として「茶話処」が開催。また、3月には楽の会リーラと合同で、新たな家族会の立ち上げも予定されている。

2019年度からスタートする「おおた健康プラン（第三次）」の中でも、ひきこもり問題は一つの柱になる予定だ。「複合的な課題を抱える世帯が増えている中で、家族ごと地域から孤立してしまわないための支援が必要」と担当者は話す。

年取る親子 社会的に孤立

利用者宅を訪ねたら、奥でひきこもっている息子や娘がいた——。ときには、障害があつて家族自身に支援が必要なんてことも。利用者だけでなく、家族にも目を向けざるを得ない現実、現場が一番実感していることかもしれない。

年取いた母に、独身で無職の子どもという構図に「危なっかしい」と感じるケアマネジャーの感覚は決して間違いではない。例えば、昨年だけでも、70～80代の親と40～50代の子どもの関係する事件には、以下のようなものがあった。

・札幌市のアパートで82歳の母親とひきこもりの52歳の娘の遺体が発見。低栄養と低体温症による衰弱死。親子